



(しおり)

# 《京都》御所と離宮の栞 ～其の二十二～



## ご挨拶

「《京都》御所と離宮の栞」は平成24年の「其の一」を皮切りに、京都の御所・離宮にみられる古来の宮廷文化を国民の皆様へお届けすることを目的として「其の二十一」まで発行してきました。

令和の時代を迎え、より一層充実した内容を目指し、今後も皇室文化、宮廷文化をより分かりやすく紹介できるよう努めて参ります。また、参観に来られた方々からのご照会等を参考に特集記事を制作しております。建築物や障壁画、庭園にみられる優美で気品あふれる姿、時にはユニークな意匠もお楽しみいただければ、幸いです。



京都御所

## 京都仙洞御所・京都大宮御所について(前編)

本年は、御代替わりに関係する儀式等が行われています。今回と次回は、過去大嘗祭が行われた京都仙洞御所、および天皇皇后両陛下、上皇上皇后両陛下がご使用になられている京都大宮御所を2回にわたり特集したいと思います。

## ◆ 概要と歴史

京都仙洞御所、京都大宮御所は、京都御所の南東に位置し、その北側には、京都迎賓館があります。京都御所と同じく、築地塀に囲まれ、その西側には、京都仙洞御所の正門(写真：左下)と京都大宮御所の正門を見ることができます。

現在、京都仙洞御所は、優雅な回遊式庭園(写真：右下)として、京都大宮御所は、天皇皇后両陛下や上皇上皇后両陛下の行幸啓時の御宿泊所として用いられており、またかつては、上皇や皇太后のお住まいとして用いられていた施設です。



京都仙洞御所正門



京都仙洞御所庭園北池 観

「仙洞」とは仙人の住居という意味を持ち、「仙洞御所」は、譲位された天皇（上皇）のお住まい、「大宮御所」は皇太后のお住まいとなり、これらの場所は、古くは一定していませんでした。

現在の場所に仙洞御所が設けられたのは寛永7年（1630）で、後水尾天皇が上皇になられた際に造営されたものが最初となります。江戸時代初期から後期にかけて、「仙洞御所」には6方の上皇（後水尾・霊元・中御門・桜町・後桜町・光格の各上皇）が、「大宮御所」には4方（東福門院・新上西門院・青綺門院・新清和院）の皇太后または女院（皇后・皇太后などで院号を賜った方。その場合は女院御所と呼ばれた）がそれぞれお住みになりました。

しかし、京都御所と同じく度重なる火災により、焼失と再建が繰り返され、後水尾上皇に至っては、御存命中に3回もの火災に見舞われています。仙洞御所は、嘉永7年（1854）に起きた大火によって、醒花亭（写真：左下）を残して焼失しており、これ以降、居住される上皇がおられないために御殿は再建されず、庭園だけがその面影を残しています。

近代に入り、大正天皇、昭和天皇の大嘗祭では、御殿の跡地が大嘗宮として用いられた他、明治時代に、京都博覧会の会場として用いられることもありました。

一方、大宮御所は、九条夙子（英照皇太后）のために慶応3年（1867）から再建が行われ、翌年皇太后となった夙子が、明治2年（1869）よりお住みになっています。その後、明治5年（1872）に英照皇



京都大宮御所 御常御殿 観

太后が東京に移られた後は、御常御殿（写真：右上）のみが現存しており、天皇皇后両陛下や上皇上皇后両陛下の行幸啓時の御宿泊所として用いられていることに加え、英国のエリザベス女王など外国貴賓の御宿泊所としても使用された実績があります。

## ◆ 京都での大嘗祭

前述のとおり、大正天皇、昭和天皇が即位された際の大嘗祭が、江戸時代にあった仙洞御所旧御殿の跡地（写真：右下）を用いて行われ、「大嘗宮」が造営されています。

「大嘗祭」とは、皇位の継承に関わる儀式の一つで、天皇が初めて新穀を皇祖及び天神地祇に供えられ、自らも召し上がり、国家・国民のためにその安寧と五穀豊穡などを感謝し祈念される儀式で、特別な祭場として大嘗宮が造営されます。

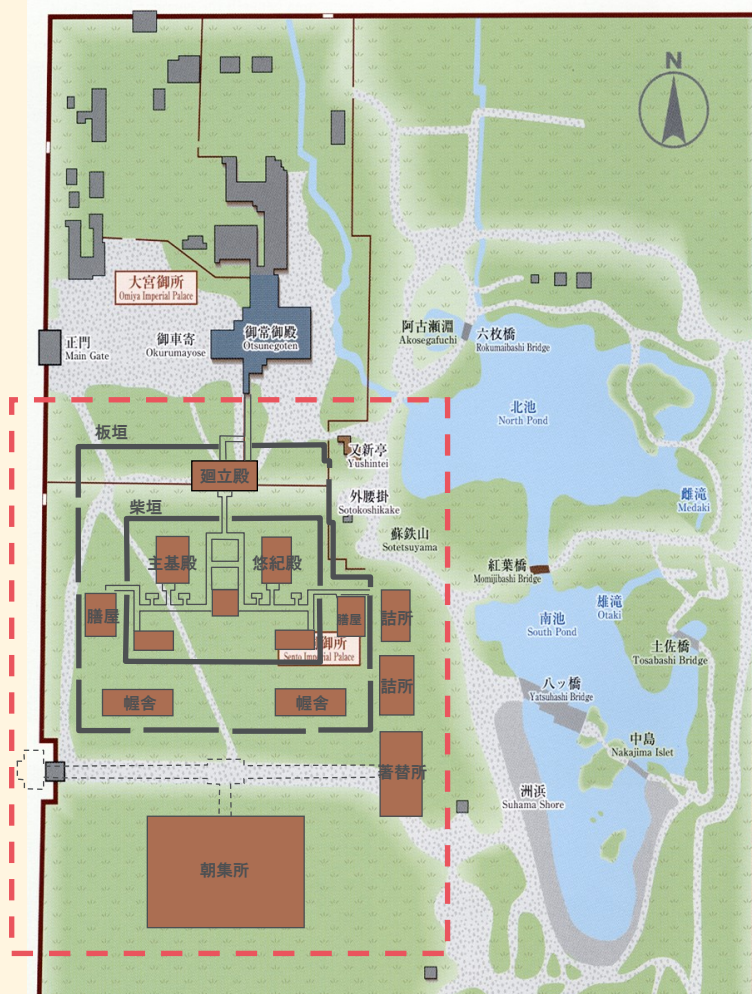
古来、朝堂院（八省院）で行われていましたが、朝堂院が荒廃した後は、紫宸殿の南庭が使用されるようになりました。



醒花亭 観



仙洞御所旧御殿の跡地



『昭和大礼要録』を参考とした大宮宮等イメージ図

(一部省略)



大宮宮の一部（主基殿）

宮内庁京都事務所所蔵ガラス乾板（昭和大礼）



大宮宮一般拝観の様子

宮内庁京都事務所所蔵ガラス乾板（昭和大礼）

大宮宮には、柴垣を巡らせた内側の東側に悠紀<sup>ゆき</sup>殿<sup>でん</sup>、西側に主基殿<sup>すきでん</sup>を建て、外側には天皇が身を清められる<sup>かいらゆうでん</sup>為の廻立殿や参列者の為の握舎<sup>あくしや</sup>など大小30余の建物が設けられます。悠紀・主基とは神饌に供するための穀物を用意する地域のことを言い、現在では東日本を悠紀地方、西日本を主基地方に分け、斎田点定の儀によって決定され、それぞれから新穀が献上されます。天皇は悠紀殿、主基殿それぞれにおいて献上された新穀を捧げ、自らも新穀をお召し上がりになります。儀式終了後は、大正・昭和ともに一定期間、国民に公開され、解体の際には、一部の建物を京都府や京都市内の学校等に下賜されています。平成の大宮宮は皇居東御苑に造営されており、令和の大宮祭においても同様です。

次回は後編として京都仙洞御所の庭園の変遷を中心に特集したいと思います。



南池に架かる八ッ橋 観



文化年間庭園絵図

# 《京都》御所と離宮の栞 ～其の二十三～

## 京都仙洞御所・京都大宮御所について(後編)

京都仙洞御所の庭園は、全体の敷地の東側半分以上を占め、北池と南池二つの池が広がる優雅な回遊式庭園です。後水尾上皇の時代に女院御所、仙洞御所それぞれの庭園として個別に作られ、時代とともに変化を遂げ、現在の形状となりました。今号ではこの変遷を中心にをご紹介します。

### ◆ 現在の庭園(2頁 図1参照)

#### 北池

前号(栞其の二十二)で紹介した京都大宮御所御常御殿からその東側にある築地塀の潜り門を通ると、視界いっぱいに広がる北池(写真:左下)が現れ、右手には紅葉山、正面には中島が浮かび、その背後には借景として取り入れられた東山連峰が望まれます。また、緩やかな曲線を描く苑路は、優しくのどかな風景を感じさせます。

苑路を歩むと、阿古瀬淵(4頁「仙洞十景」で後述)にある6枚の切石を使用した「六枚橋」や中島にある2枚の切石を食い違いに並べたハツ橋のような特色ある石橋(写真:右上)をみることができ、秋には紅葉が、春にはサツキやツツジ等の花が苑路を彩ります。

#### 南池

北池東部の雌滝から南池に向かって苑路を進み堀割(2頁「庭園の原型」で後述)のある紅葉橋を越えると、南池中央の藤棚のある「ハツ橋」(写真:



北池中島 石橋 観

右下, 栞其の三)が目に入ります。南池のほぼ中央には近接した二つの中島があり、ハツ橋とさらに二つの石橋が東西の岸とこれら中島を結んでいます。これらによって南池は二つの池に分かれているように見え、その北側と南側ではそれぞれ雰囲気の違いが感じ取れます。北側には落差約1.8mある雄滝や出島があり、南側には、池沿いに100mを超える範囲で直径約10cmの玉石で敷き詰められた「洲浜」(栞其の六)が広大な景観を展開しています。最も南には、庭園内で唯一焼失を免れた茶屋である醒花亭が端正な姿で佇んでいます。



北池 観



南池 藤棚とハツ橋, 洲浜 観

## 庭園の原型

これらの庭園の原型は、幕府から作事奉行を命じられた小堀遠州が寛永11年（1634）から同13年にかけて作庭したもので、後水尾上皇が仙洞御所に移られて間もなくのことでした。

当時の庭園の形状は現在とは大きく異なるものでした。庭園の広さは現在と比較するととても小さく、北池と南池の間は塀で仕切られ、現在のように堀割で繋がっておらず、北池は女院御所の池、南池は仙洞御所の池として分かれていました。南池に当たる仙洞御所庭園では、直線の護岸を多用した方形状の池の中央に大きな島が存在していました（図2参照）。現在も、南池東岸にある石橋「土佐橋」から南にかけて一直線状に切石を積んだ護岸が見受けられます（写真：左下）。



南池 土佐橋（左）と当初の名残といわれる護岸（赤丸）観



図1 現在の庭園

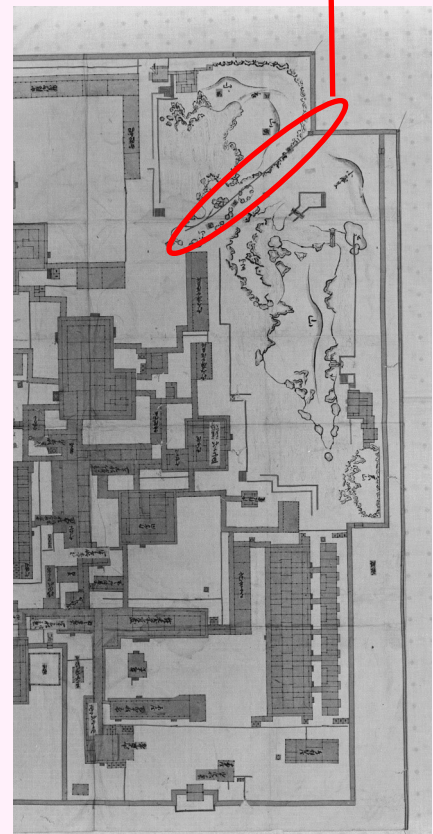
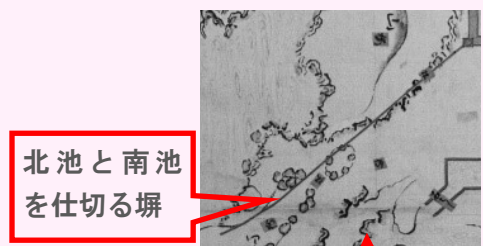


図2 寛永度後水尾院御所並東福門院御所指図（部分） 宮内庁書陵部所蔵

## その後の変遷

寛永度の庭園は、池の拡張などの大きな改修が加えられていきます。改修は、後水尾上皇在世中から始まり、霊元天皇が上皇になられた貞享4年（1687）に作成された図（3頁 図3）を見ると、当時の形状が現在の庭園の基礎となったことがわかります。この図では、未だ北池と南池は繋がっておらず、橋が今とは違う位置に架かっているなど、現在と異なる姿も見受けられます。

北池の中島と南岸を結ぶ「土橋」（図3）は今はありませんが、現在でも古い橋の礎石と思われるもの（写真：3頁左上）が存在します。



北池 中島にある礎石と思われるもの 観

その後、18世紀の前半までに二つの池が中央で堀割によって繋がれ、一つの池となったことに加え、全体の敷地が拡大し、北側には水田が作られました。更に、前述した北池中島にあった土橋はなくなり、南池中島は二つに分かれるなど、庭園の形状は現在に近いものとなりました。

また、延享4年（1747）に譲位して仙洞御所に入られた桜町上皇の命により冷泉為村が選んだという「仙洞十景」（4頁）には、現在存在しない鑑水などの茶屋が見えています。文化9年（1812）に画かれた図（図4-1，図4-2参照）にはこれらの建物や樹木等が画かれ、当時の情景が表現されています。

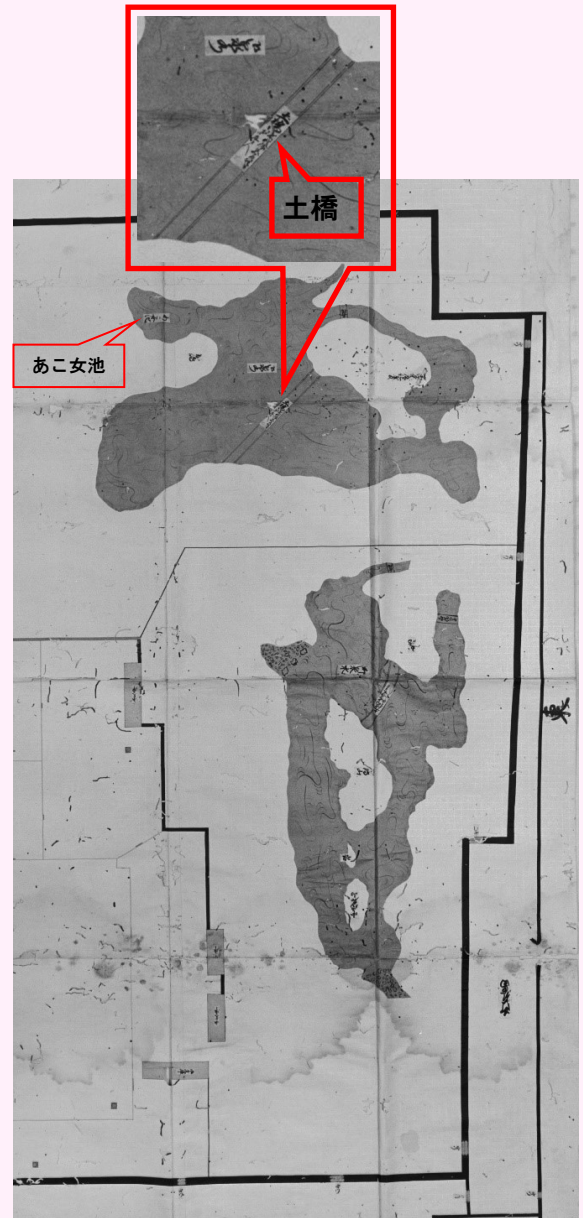


図3 延宝度霊元院御所・新上西門院御所（貞享）指図（部分） 宮内庁書陵部所蔵



図4-1 文化年間仙洞御所御庭之図  
水田及び北池部分 宮内庁京都事務所蔵

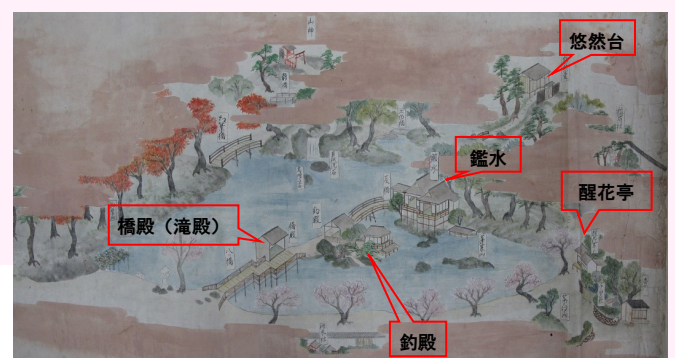


図4-2 文化年間仙洞御所御庭之図  
南池部分 宮内庁京都事務所蔵

## ◆ 仙洞十景

仙洞十景とは、①「醒花亭の桜」、②「寿山の早苗<sup>そうびょう</sup>」、③「悠然台の月」(葉其<sup>はき</sup>の十八)、④「古池<sup>こけらぶき</sup>の款冬」、⑤「釣殿<sup>ひけい</sup>の飛蛭」、⑥「茅葺<sup>せきしょう</sup>の時雨」、⑦「鑑水<sup>しんし</sup>の夕照」、⑧「神祠<sup>しんし</sup>の夜灯」、⑨「滝殿<sup>ししさい</sup>の紅葉」、⑩「止々斎<sup>ししさい</sup>の雪」と伝えられ、仙洞御所庭園の四季を感じとることができる内容が選定されています。この中から現在も鑑賞することができる「醒花亭の桜」と「古池の款冬」をご紹介します。

### 醒花亭の桜 (写真：左下)

現在も、南池の最南部に庭園全体を見渡せる柿葺<sup>こけらぶき</sup>の茶屋である醒花亭があります。醒花亭の北側には、南池西岸の広大な洲浜に沿って広い道が真っ直ぐに伸びており、その両側にはヤマザクラ等が植えられ、「桜の馬場」と呼ばれています。

春には見事な花を咲かせ、うらかな春の遊びにふさわしい環境であり、当時の様子に思いを馳せることができます。

### 古池<sup>こけらぶき</sup>の款冬 (写真：右上)

北池北西に、六枚橋の石橋が架かる阿古瀬淵という古い湧泉の跡と考えられている小さな入り江があります。阿古瀬淵は、仙洞御所が造営される以前からあると言われています。阿古瀬淵の周囲では、晩春から初夏にかけて、黄金色に咲くヤマブキを見ることができます。



醒花亭前の桜 観

## ◆ まとめ

以上のとおり、京都仙洞御所の庭園は、作庭当初の姿から約400年という長い年月をかけて徐々に変遷を遂げ、今日に伝わる歴史的にとっても重要な文化遺産です。前号(葉其<sup>はき</sup>の二十二)から京都仙洞御所・京都大宮御所のご紹介を2回にわたり掲載しました。今なお残る宮廷文化への関心を高める一助となれば幸いです。



北池 阿古瀬淵に咲くヤマブキ 観

今回は参観者の方々から「細川幽斎と桂離宮の関係とは？」とよくご質問のある幽斎ゆかりの「園林堂<sup>おんりんどう</sup>」を特集いたします。



園林堂 観

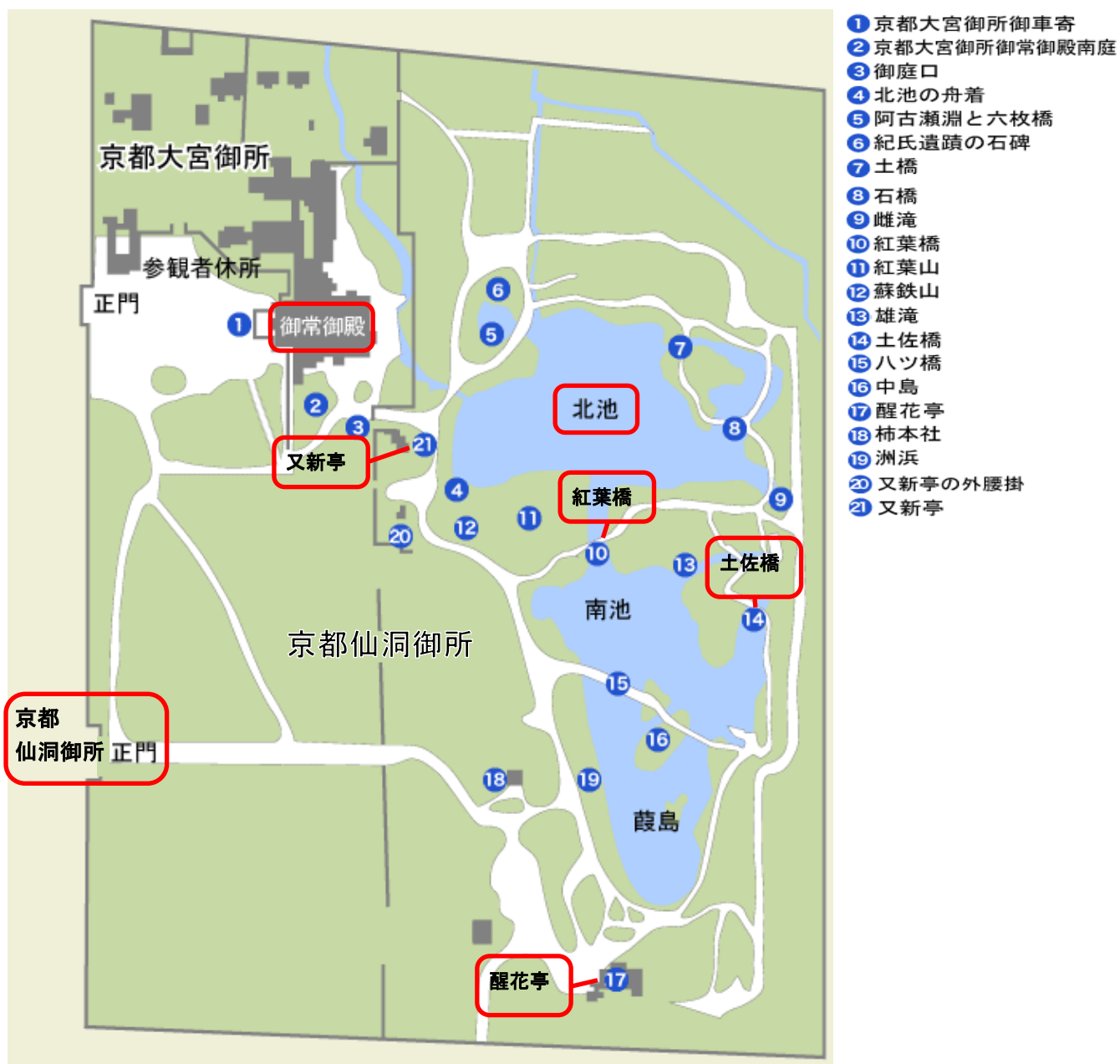


しゅみだん  
須弥壇 (内部)



細川幽斎像  
宮内庁京都事務所所蔵

# 京都仙洞御所・京都大宮御所案内図



**観**マークは、参観でご覧になれます。申込み方法は、<http://sankan.kunaicho.go.jp/> をご覧ください。

**通**マークは、申込不要の京都御所通年公開でご覧になれます。

詳細は、<http://www.kunaicho.go.jp/info/kyototsunen-sks-sankan.html> をご覧ください。

これまでの「《京都》御所と離宮の葉」については、宮内庁ホームページの[こちら](#)からご覧ください。

<問い合わせ先>

〒602-8611 京都市上京区京都御苑3 宮内庁京都事務所

代表電話：075-211-1211 参観係直通電話：075-211-1215